

# 仲村 秀一郎(なかむら ひでいちろう)さんがUN職員になる過程をのぞいてみよう (1~11に当てはまると思う部分にマーカーしながら読もう！)

1. 勤務（予定）の国連機関名
2. 中学生の時のできごと
3. 最初の職業と職場
4. 高校時代からの夢
5. 大学卒業後の進路
6. 大学院卒業後に働いた最初の国
7. 県出身者として初めて〇〇〇で勤務
8. 〇〇〇で行った業務（仕事内容）
9. 海外で働いて気づき大事だと思ったこと
10. 今後の夢
11. その他、1~10以外で補足説明したいこと

①国際金融機関で働く仲村秀一郎さんが1月、外務省のJPO派遣制度試験に合格した。3月に国連開発計画（UNDP）で防災の専門職員としてアフリカへ派遣される。多感な時期に家庭崩壊など逆境を乗り越えてきた仲村さん。海外での経験を重ねることで、苦しい立場の人に手を差し伸べ、誰かの役に立つような仕事をしたいと考えるようになったという。

②中城村南上原で生まれ育った。父は定年退職後、朝から酒を飲み周りに迷惑をかけていた。父と口論が絶えなかった母は、仲村さんが中学2年生の夏に突然いなくなった。親戚夫婦が仲村さんと妹らの面倒を見た。

③好きだった英語の勉強は続け普天間高、沖縄キリスト教学院大に通った。大学3年の2009年に嘉手納基地内の消防で働くことが決まり、学業を続けながら消防士の勤務をこなした。何度も人の死に直面し「人はいつ死ぬか分からない。基地のフェンスの中でキャリアを終えるのは嫌だ」と考えるようになった。

④高校時代から国連機関で働くことが夢で、大学卒業後の2012年、通信制の吉備（きび）国際大大学院（岡山県）に通い、防災関係の修士号を取得した。海外経験を積むため2017年に消防の仕事辞め、国際協力機構（JICA）でジャマイカ国へ。防災対策などの経験を重ね、2019年から県出身者として初めて、米州開発銀行（IDB）で勤務する。IDBでは気候変動や自然災害に関して調査し、政策を提言する業務などを担う。

⑤海外で働くと、低所得の家庭の子どもは低所得の仕事に就くという“コミュニティーの階層”が、どこにでもあることに気付いた。それを打破するには勉強を重ねたり、コミュニティーから出たりして、選択肢を広げることが大事と考えている。

⑥父は2011年、自宅で倒れた。いつものように酔いつぶれているだけと思い、仲村さんはそのまま消防へ出勤した。その後、病気があったことが判明し、帰らぬ人になった。仲村さんは「父を見捨てた」と責任を感じ、償いのため人の役に立ちたいとの思いもある。

⑦2021年2月末でIDBを辞め、UNDPの防災担当としてアフリカ南部のマラウイに2年間赴く。将来は沖縄に戻り、防災関係で「沖縄のためになることをしたい」と目標を掲げる。「一人で世界は変えられないが、一人の世界は変えられる。少しでも人の役に立ちたい」と挑戦は続く。

